

大学生のスポーツに対する意識の研究

－男子学生と女子学生の比較－

A Study of Consciousness Factors toward Sports in the Case of University Students

－Comparison of Male Students and Female Students－

田中 秀幸¹⁾・窪田 辰政²⁾・山本 章¹⁾・伊藤 宏¹⁾

Hideyuki TANAKA¹⁾, Tatsumasa KUBOTA²⁾, Akira YAMAMOTO¹⁾ and Hiroshi ITO¹⁾

(平成21年10月6日受理)

Abstract

This paper was a study of the consciousness factors that university students possess towards sports. We asked 189 students, 116 male students and 73 female students 3 university students to respond to a questionnaire prepared by Kyoritsu university health and physical education laboratory. The following results were obtained.

- 1) We found two consciousness factors for male students and three consciousness factors for female students. We focused on the first factors from each group, as these represented 89.379 and 95.907 percent, respectively.
- 2) It was considered that the consciousness construction of sports was constituted by the factor of physical condition and sociability.
- 3) Some similarity was observed between male students and female students in the following five categories: sociability, volition, emotion and feeling, vitality and physical condition.

キーワード: 意識構造、男子学生、女子学生、因子分析、スポーツ

Key words: consciousness construction, male student, female student, factor analysis, sports

I. はじめに

スポーツは今や人々の生活の中に定着してきている。見るスポーツ、行うスポーツ、支えるスポーツなど、人生を彩りある、豊かにする一つのツールとして欠かすことのできないものとなっている。青少年から高齢者まで幅広く汗を流す姿を多く見受けるようになった。ウォーキング、ジョギングをはじめ、さまざまな軽スポーツまで、数々のスポーツが多くの人々に親しまれている。生活に追われて食べるため生きるために働くことが主であった戦後の時代から、

¹⁾静岡大学 ²⁾静岡産業大学

余暇を思い思いに楽しむ豊かな時代へと変化してきた。チャンピオンを目指す競技スポーツに人気がある一方で、余暇の過ごし方の中に多く見られるのが、健康志向からくる身体活動の奨励としての楽しむスポーツであり、日々の生活に定着している。情報社会の今、人々はからだに良いこととして医科学の知識を入手し、スポーツに熱中している。

しかし、物質的には豊かでも人間交流、精神的に貧しい社会とも言えるのではないだろうか。中学、高校生は携帯メールに熱中し、心からの友人は少ない。お互いがライバル、競争相手であり、真の友情は湧いてこない。今日の競争社会がもたらした弊害であり、心の貧しさを感じている青少年は多いと思われる。からだを動かすことによってストレスを解消し、健康・体力を維持し、心から交流できる真の友人を持つことができるように、我々は授業を通して指導していく必要を感じている。

このような社会情勢の中にあって、我々教育現場において日頃から学生指導に携わる者としては、学生たちのスポーツに対する意識について把握しておくことは、より良い授業を展開していく上で不可欠である。これまでの先行研究として、共立女子大学体育学研究室作成による質問紙によって、五日市らが中国と日本における女子学生¹³⁾、また韓国と日本における女子学生の「スポーツ」に対する意識の構造と比較¹⁴⁾について報告している。それらによると、中国女子学生ではスポーツは社会性を身につけるための一つ的手段と考えているが、我が国の女子学生は楽しく実践活動をすることにより自己の健康づくりと考えている。また「健康的な美しいボディ・プロポーション」に対する意識の間に容姿だけでなく、スポーツの持つ内面性を会得しようとする韓国体育専攻女子学生と日本一般学生の両群に意識の傾向に差異があるように思われた、としている。また五日市らが1991年と2006年に調査した日本女子学生の「スポーツ」に対する意識構造と年代ごとの比較¹⁵⁾によると、両群とも「スポーツと社会性」に関与する因子の貢献度が高く、スポーツの持つ意義と必要性は認めているが、スポーツの実践を通し、積極的に運動技術を高めたり、安全性を身につけるといった専門的知識や技術の習得に対する価値を見出すことはできず、意識と行動にずれが見られた、と報告している。しかし、これらはすべて女子学生に対する調査結果である。近年、五日市ら¹⁶⁾により男女学生を対象とした意識構造の実態を比較した報告が見られるものの、十分な研究がなされていないのが現状である。今後、より良い授業を行うための参考資料として、男子学生を含む大学生を対象としたスポーツに対する意識調査の必要性を強く感じた次第である。本研究は、東海及び関東地区の3大学の学生189名（男子116名、女子73名）を対象に、スポーツに対する意識構造の実態を明らかにし、男女で比較検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象および調査期間

本研究の調査対象は東海および関東地区の3大学の学生189名（男子116名、女子73名）である。年齢は18歳から26歳であり、平均年齢は男子19.6歳、女子は18.7歳であった。調査期間は平成21年4月中旬から下旬にかけてである。

2. 調査方法

調査の実施にあたり、質問紙の配布は筆者らが行い、担当授業の時間に実施し、その場で回収した（集合調査法）。回収された質問紙に不備のあるもの、あるいは回答態度に不真面目さの伺えるものは見当たらなかった。

3. 質問紙の構成

質問紙は表1に示すように五日市ら¹⁶⁾と同一の項目を用いて、カテゴリーの分類も同様に社会性、意志性、活動性、身体性、情緒性の5つに分類した。具体的な質問項目は、以下のような項目で構成されている。（ ）内の数字は質問項目の番号を示す。

社会性…… (5) 社交性が身につく、(9) 友人が出来る、(13) 人間生活に必要なもの、(19) 話題が豊富になる、(24) 礼儀正しくなる、の5項目。

意志性…… (7) 忍耐力・精神力をつける、(11) 美しいプロポーションをつくる、(18) 自信・決断力をつける、(21) 行うことに興味・関心がある、(25) 自己の向上に役立つ、の5項目。

活動性…… (3) 身体を動かすことに意義がある、(6) 運動技術が身につく、(15) 積極性が身につく、(17) 競争心を満足させられる、(23) 動作が機敏になる、の5項目。

身体性…… (1) 健康維持のために必要である、(4) 体力を身につける事ができる、(10) 肥満防止に役立つ、(12) 食欲を増す、(20) よく眠れるようになる、の5項目。

情緒性…… (2) ストレスの解消（気分転換）に役立つ、(8) 安全性が身につく、(14) 協調性が身につく、(16) 集中力が身につく、(22) 性格が明るくなる、の5項目の計25項目で、質問紙ではそれらの項目はランダムに配置され、それぞれの項目について5段階評価尺度法によって調査が行われた。

4. 分析方法

本研究では、スポーツに対する意識の構造を統計学的立場から推定するための方法として、因子分析的手法を用いた。調査後、回収された質問紙を男女2群に分け「もっとも強く感じる(5点)」「かなり強く感じる(4点)」「普通(3点)」「あまり感じない(2点)」「まったく感じない(1点)」として調査内容を得点化し、各評価について計算されたそれぞれの相関行列(25×25)に主因子法を施し、固有値が1.0以上の主成分について、ノーマル・バリマックス(normal varimax) 基準による直交回転を適用して多因子解(multiple factor solution)を求めた。

表1 質問紙

(年齢 満 歳) (性別 男 ・ 女)

アンケートにお答えください。

貴方はスポーツに関してどのような意識を持っていますか。貴方の答えにあてはまる番号を○で囲んで下さい。

この場合できるだけ第一印象で答えてください。

スポーツは	最も強く 感じる	かなり強く 感じる	普通	あまり 感じない	全く 感じない
1 健康維持のために必要である……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
2 ストレスの解消(気分転換)に役立つ……	5	— 4	— 3	— 2	— 1
3 身体を動かすことに意義がある……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
4 体力を身につけることができる……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
5 社交性が身につく……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
6 運動技術が身につく……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
7 忍耐力・精神力をつける……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
8 安全性が身につく……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
9 友人ができる……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
10 肥満防止に役立つ……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
11 美しいプロポーションを作る……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
12 意欲が増す……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
13 人間生活に必要なもの……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
14 協調性が身につく……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
15 積極性が身につく……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
16 集中力が身につく……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
17 競争心を満足させられる……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
18 自信・決断力をつける……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
19 話題が豊富になる……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
20 よく眠れるようになる……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
21 行うことに興味・関心がある……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
22 性格が明るくなる……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
23 動作が機敏になる……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
24 礼儀正しくなる……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1
25 自己の向上に役立つ……………	5	— 4	— 3	— 2	— 1

Ⅲ. 結果および考察

1. 男子学生のスポーツに対する意識の構造

男子116名についてⅡ. 方法4を用いて因子負荷行列を求めた。抽出された回転後の因子負荷行列は表2に示した。ここでは因子負荷量が0.5以上を有意とし、2因子が抽出され累積貢献度は41.81%であった。

第1因子の全分散に対する貢献度は37.36%であり、因子負荷量が0.5以上の項目を因子負荷量の高いものから順に列挙すると、社交性が身につく(0.780)、友人ができる(0.762)、安全性が身につく(0.635)、礼儀正しくなる(0.631)、集中力が身につく(0.597)、積極性が身につく(0.584)、自信・決断力をつける(0.534)、協調性が身につく(0.517)、競争心を満足させられる(0.513)、性格が明るくなる(0.502)、の10項目が抽出された。

第2因子の貢献度は4.44%であり、因子負荷量が0.5以上の項目を因子負荷量の高いものから順に列挙すると、人間生活に必要なもの(0.710)、体力を身につけることができる(0.672)、動

作が機敏になる(0.622)、行うことに興味・関心がある(0.583)、運動技術が身につく(0.532)、肥満防止に役立つ(0.520)、健康維持のために必要である(0.514)、の7項目が抽出された。

2. 女子学生のスポーツに対する意識の構造

女子学生73名についてⅡ. 方法4を用いて因子負荷行列を求めた。抽出された回転後の因子負荷行列は表2に示した。ここでは因子負荷量が0.5以上を有意とし、3因子が抽出され累積貢献度は52.05%であった。

第1因子の全分散に対する貢献度は39.51%であり、因子負荷量が0.5以上の項目を因子負荷量の高いものから順に列挙すると、ストレスの解消(気分転換)に役立つ(0.730)、健康の維持のために必要である(0.720)、行うことに興味・関心がある(0.691)、体力を身につけることができる(0.650)、自己の向上に役立つ(0.603)、人間生活に必要なもの(0.578)、身体を動かすことに意義がある(0.558)、運動技術が身につく(0.532)、社交性が身につく(0.511)、の9項目が抽出された。

第2因子の貢献度は8.03%であり、因子負荷量が0.5以上の項目を因子負荷量の高いものから順に列挙すると、協調性が身につく(0.737)、集中力が身につく(0.730)、友人ができる(0.589)、積極性が身につく(0.579)、礼儀正しくなる(0.558)、競争心を満足させられる(0.528)、社交性が身につく(0.511)、の7項目が抽出された。

第3因子の貢献度は4.51%であり、因子負荷量が0.5以上の項目を因子負荷量の高いものから順に列挙すると、肥満防止に役立つ(0.745)、動作が機敏になる(0.698)、美しいプロポーションを作る(0.644)、食欲を増す(0.522)、の4項目が抽出された。

表2 回転後の因子負荷行列男女 (男子N=116 女子N=73)

	1		2		3		共通性	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1		0.720	0.514				0.284	0.548
2		0.731					0.238	0.573
3		0.559					0.305	0.342
4		0.650	0.672				0.507	0.480
5	0.780	0.512		0.552			0.623	0.568
6		0.532	0.523				0.414	0.573
7							0.406	0.428
8	0.636						0.510	0.442
9	0.762			0.589			0.603	0.533
10			0.521			0.745	0.326	0.559
11						0.664	0.282	0.443
12						0.522	0.247	0.319
13		0.578	0.711				0.554	0.564
14	0.518			0.737			0.374	0.580
15	0.584			0.580			0.494	0.636
16	0.597			0.730			0.547	0.624
17	0.513			0.529			0.471	0.557
18	0.535						0.443	0.561
19							0.280	0.502
20							0.205	0.315
21		0.691	0.583				0.398	0.592
22	0.502						0.498	0.585
23			0.622			0.699	0.512	0.615
24	0.631			0.558			0.525	0.536
25		0.603					0.404	0.537
貢献量	9.341	9.877	1.110	2.008		1.127	10.451	13.012
貢献度 (%)	37.364	39.508	4.440	8.032		4.508	41.804	52.048
累積貢献度 (%)			41.804	47.540	41.804	52.048		

3. 男子学生と女子学生の「スポーツ」に対する意識構造の比較

抽出された回転後の因子負荷行列の因子負荷量が0.5以上を有意として検討した。男子の結果は2因子が抽出され、累積貢献度は41.81%であった。各因子を列挙すると、第1因子は社会性が身につく、友人ができる、礼儀正しくなるは社会性。安全性が身につく、集中力が身につく、協調性が身につく、性格が明るくなるは情緒性。積極性が身につく、競争心を満足させられるは活動性。自信・決断力をつけるは意志性の項目であるが、安全性が身につく、集中力が身につくは情緒性をともなった関連項目であることから「情緒性をともなった社会性因子」と解釈した。

第2因子は人間生活に必要なものは社会性。体力を身につけることができる、肥満防止に役立つ、健康維持のために必要であるは身体性。動作が機敏になる、運動技術が身につくは活動性。行うことに興味・関心があるは意志性の項目である。これらは自ら積極的に身体を動かすことによって体力、健康を維持し、動作、運動技術を身につけようとする関連項目であることから「積極的身体性因子」と解釈した。

男子のスポーツに対する意識の構造は、第1因子「情緒性をともなった社会性因子」、第2因子「積極的な身体性因子」という因子から構成されていた。

一方、女子は3因子が抽出され、累積貢献度は52.05%であった。抽出された各因子を列挙すると、第1因子はストレスの解消（気分転換）に役立つは情緒性。健康維持のために必要である、体力を身につけることができるは身体性。行うことに興味・関心がある、自己の向上に役立つは意志性。人間生活に必要なもの、社交性が身につくは社会性。身体を動かすことに意義がある、運動技術が身につくは活動性の項目である。ストレスの解消や体力をつける、また運動により健康を維持しようとする関連項目であることから「健康に配慮した身体性因子」と解釈した。

第2因子は協調性が身につく、集中力が身につくは情緒性。友人ができる、礼儀正しくなる、社交性が身につくは社会性。積極性が身につく、競争心を満足させられるは活動性の項目である。ここでは礼儀正しくや社交性を身につけるなどの「社会性が見られる情緒性因子」と解釈した。

第3因子は肥満防止に役立つ、食欲を増すは身体性。動作が機敏になるは活動性。美しいプローションを作るは意志性を示す関連項目であることから「自己の容姿に対する身体性因子」と解釈した。

以上のことから女子のスポーツに対する意識の構造は、第1因子「健康に配慮した身体性因子」、第2因子「社会性が見られる情緒性因子」、第3因子「自己の容姿に対する身体性因子」という因子から構成されていた。

以上これまで探索的な意味合いから2つおよび3つの因子のすべてについて実験的に解釈を試みたが、そのなかでも男子学生からみたスポーツに対する意識、および女子学生からみたスポーツに対する意識は、0.5以上の有意な因子負荷量から考慮して、第1因子が特に実質的側面からの意義を見出すことができるであろう。そしてそれがどの程度強く、安定した因子であるかについては、今後仮説検証的な立場での検討が必要であると思われる。そして社会性、意志性、活動性、身体性、情緒性の5つのカテゴリーとは、あくまで本研究の論理を進める上での仮説的領域であり、今回の結果は抽出された因子が必ずしも仮説のような単純な構造を示しているのではないということを示していると考えられる。

男女それぞれから抽出された因子1～2つまでの全分散に対する貢献度を見ると、男子の貢献度は第1因子37.36%、第2因子4.44%であり、第1、第2因子を合わせても41.81%であり、貢献度としてはやや低い値を示した。女子の貢献度は第1因子39.51%、第2因子8.03%、第3因子4.51%であり、第1～3因子を合わせて52.05%となり、貢献度としては男子より高い値を示した。第1因子だけで男子学生は37.36%、女子学生は39.51%を示し、本研究で抽出された全因子で説明される分散の89.379%（男子学生）、95.907%（女子学生）と4/5以上を説明しており、仮定された領域において注目すべき因子と考えられた。

男子学生の第1因子は「情緒をともなった社会性因子」、第2因子は「積極的な身体性因子」であり、女子学生の第1因子は「健康に配慮した身体性因子」、第2因子は「社会性の見られる情緒性因子」、第3因子は「自己の容姿に対する身体性因子」であった。両群とも第1、第2因子に身体性が見られ注目された。また社会性も両群に見られ類似していた。これは学生のスポーツに対する意識構造が身体性、社会性因子を主として構成されていることを示すものと見なされた。そして大学における保健体育科目として、体育実技でスポーツを行っている意義と必要性が、学生に十分理解されている結果と推察された。

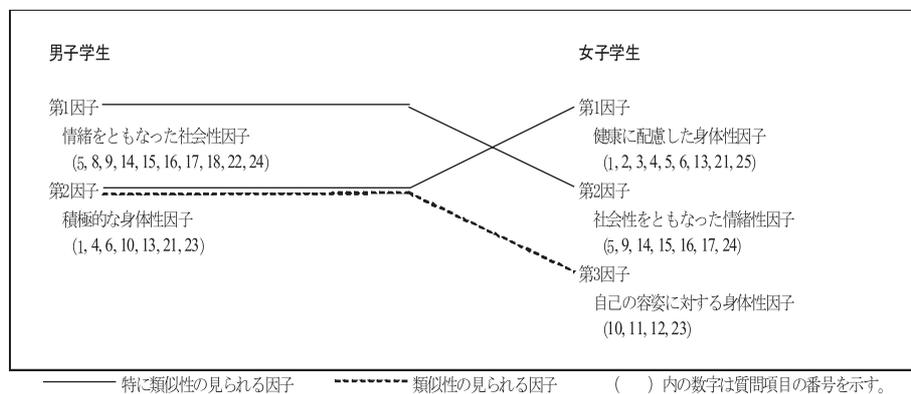


図1 両群間の因子構造の類似性

また、男女両群より抽出された各因子の類似性について図1に示した。0.5以上の因子負荷量を示し同一の質問項目で2項目共通している因子について「類似性が見られる因子」とし、3項目以上共通している因子について「特に類似性が見られる因子」として解釈を試みた。その結果、男子学生の第1因子と女子学生の第2因子との間において、社会性因子の(5)社会性が身につく、(9)友人ができる、情緒性因子の(14)協調性が身につく、(16)集中力が身につく、活動性因子の(15)積極性が身につく、(17)競争心を満足させられる、の6項目に共通した因子が見られ、男子学生の第2因子と女子学生の第1因子との間において、身体性因子の(1)健康維持のために必要である、(4)体力を身につけることができる、活動性因子の(6)運動技術が身につく、社会性因子の(13)人間生活に必要なもの、意志性因子の(21)行うことに興味・関心がある、の5項目に共通している因子が見られた。また、男子学生の第2因子と女子学生の第3因子との間において、身体性因子の(10)肥満防止に役立つ、活動性因子の(23)動作が機敏になる、の2項目に共通した因子が見られた。このように両群間には社会性、情緒性、活動性、身体性、意志性の各因子に程度の差こそあれ類似性が認められた。

本研究は、五日市¹⁶⁾の男子学生と女子学生の因子構造を比較検討した報告に続くものであ

るが、今回の調査対象は被検者数も少なく、今後調査対象を増やし更に検討を加える必要性が感じられた。

IV. 結論

本研究の目的は、共立女子大学体育学研究室作成の質問紙（25項目）を用いて、東海及び関東地区の3大学の学生189名（男子116名、女子73名）を対象に、スポーツに対する意識の実態を明らかにし、男女で比較検討することであった。その結果、以下の点が明らかとなった。

- 1) 男女学生双方の第1因子は、本研究で抽出された全因子で説明される分散の89.379%（男子学生）、95.907%（女子学生）と4/5以上が説明され、注目すべき因子と考えられた。
- 2) 学生のスポーツに対する意識構造が、主として身体性因子、社会性因子から構成されていると推察された。
- 3) 質問項目の5つのカテゴリーである情緒性、社会性、意志性、身体性、活動性について、両群間に程度の差こそあれ類似性が認められた。

引用文献

- 1) 船越正康、河崎武夫:柔道に関する意識分析-青年期について-、武道学研究、16-1、56-57、1984.
- 2) 飯田颯男、遠藤純男、菅波盛雄、青柳 領、田中秀幸、武内政幸、吉岡 剛:柔道選手に対するimageの因子分析的研究、武道学研究、16-2、8-17、1984.
- 3) 窪田辰政、田中秀幸、村上 繁:大学生の柔道に対する意識の研究(3)、杏林大学研究報告教養部門、第21巻、137-148、2004.
- 4) 松浦義行:運動能力の因子構造、不昧堂書店、107-109、1969.
- 5) 尾形敬史:添田孝幸:柔道に対する意識の研究(第1報)-中学生を対象にして-、茨城大学教育学部紀要(教育科学)、第28号、35-56、1979.
- 6) 尾形敬史:添田孝幸:柔道に対する意識の研究(第2報)-中学生を対象にして-、茨城大学教育学部紀要(教育科学)、第29号、45-63、1980.
- 7) 田中秀幸、飯田颯男:本学学生の柔道に対する意識の研究、静岡大学教養部研究報告、第21巻、37-55、1985.
- 8) 田中秀幸:水嶋武雄:高校生の柔道に対する意識の研究、静岡大学教養部研究報告、第25巻、33-51、1989.
- 9) 田中秀幸:大石孝三:女子短大生の柔道に対する意識の研究、静岡大学教養部研究報告、第27巻、41-60、1991.
- 10) 田中秀幸、窪田辰政、渡瀬益章、山本章:中学生の柔道に対する意識の研究、静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇、第36号、149-160、2005.
- 11) 田中秀幸、窪田辰政、渡瀬益章、山本章:中学生の柔道に対する意識の研究(2)、静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇、第37号、99-111、2006.
- 12) 飯田颯男:本学学生の「スポーツ」に対する意識の研究、共立女子大学国際文化学部紀要、第2号、17-37、1992.

- 13) 五日市恭子、飯田穎男、王廷娟、李東軍、劉莊宜:中国と日本における女子学生の「スポーツ」に対する意識の構造とその比較、共立女子大学国際文化学部紀要、第3号、203-219、1993.
- 14) 五日市恭子、飯田穎男、崔鵬鍾:韓国と日本における女子学生の「スポーツ」に対する意識の構造と比較、共立女子大学国際文化学部紀要、第4号、77-94、1993.
- 15) 五日市恭子、浦田華子、竹ノ谷文子、五日市享児、竹内正雄:女子大生のスポーツ意識の構造-1991年と2006年の比較-、運動とスポーツの科学、第12巻第1号、101-108、2006.
- 16) 五日市恭子、浦田華子、竹ノ谷文子、五日市享児:大学生のスポーツ意識の構造(2)-男子学生と女子学生の比較-、運動とスポーツの科学、第14巻、第1号、135-141、2008

